



紀州のミカンで良く知られている「紀伊國屋文左衛門」。謎多き人物を辿ってみました

紀州でミカンと言えば、おのずと出てくるその名前は、紀文こと紀伊國屋文左衛門。蜜柑船のサクセスストーリーで江戸っ子の人気を博し、吉原での桁外れの散財ぶりから「紀文大尽」と呼ばれ、大尽とは、富豪で、遊里(ゆうり・遊郭の事)で大金を使う客のことを言い、時代劇や時代小説に登場します。

文左衛門は、江戸の元禄時代を代表する、江戸商人の粋な旦那衆の一人となり、江戸時代から現代にかけても語り草になる人物。一説によると、時代劇でよく見ます「お代官様これを〜」。「おぬしも悪よのお〜」と、あの金饅頭の折り箱を差し出す商人は、文左衛門のお話が誇張され、お芝居になったとか。

莫大な富を得ながらも、一代で店を閉じた謎多き人物。紀伊國屋文左衛門とは、一体どんな人物だったのでしょうか。

ふいご祭りで大ヒット！「キャラクターの存在」と「ストーリー性」。それは明確なPR戦略でした。

二六四年間続く天下泰平の、町人文化が栄えた江戸時代。といっても、文左衛門が生まれ育った地は、紀州は徳川御三家のお膝元。八代將軍・徳川吉宗、一四代將軍・徳川家茂の二人を輩出した紀州。名もなき町人の一人であった者が、自由に商いを行い、その巨額な富を得るまでになったその背景を、紀州藩としてはどう受け止めていたのか。

当時、諸藩は藩財政を潤すために、領内の特産物を直轄としていたのですが、忠臣蔵の赤穂藩の塩も同様で、紀州藩のミカンもまた同じく直轄としていました。ミカンの場合、三河や伊豆方面からも



再現されたみかん船の模型。(有田市みかん資料館展示)

ライバルである駿河、現在の静岡、三ヶ日、伊豆半島産のミカンがあったのに、何故、紀州産のミカンの苗木が渡ったのでしょうか。疑問は膨らむばかりで、ならばと、紀州へと向かいました。

文左衛門は、現在の和歌山県有田郡湯浅町別所の生まれと言いつた伝えられます。幼少の頃の記録は何も残っていません。墓所も東京深川に二カ所、埼玉県熊谷市に一カ所あると言われ、また文左衛門と放蕩三昧の息子の二代目・紀文説もあつたり。大衆的人気者であることに間違いなく、不思議な人物。俗伝によれば、様々な人物像が浮かび上がります。



明らかにフィクションの話もあれば、史実に沿ったノンフィクションもありで、それらが許される文左衛門という人物像とは――

(次号に続く)

平賀源内「土用丑の日」、坂本龍馬も利用した戦略でした。

大成功したこのPR作戦ですが、その強大な効果を知つてか、後に平賀源内の提案で、夏に売上げが少なかったうなぎ屋さんに「本日土用丑の日」という看板を出させたところ大繁盛しました。また別のところでは、紀州藩の船と、海援隊借用の商船が瀬戸内海沖で衝突。積み荷の賠償問題で、長崎の市中で奇妙な唄が流行り始めます。

へ船を沈めたその償いは金を取らずに国を取る

仕掛け人は坂本龍馬でした。龍馬は紀州藩の作ったミカンのPR戦略を利用して、民衆の話題と意識を集め、紀州藩から莫大な損害賠償を勝ち取ります。何故、紀州藩はそれに応じたのかは、PRの効果が一番知る者としては、紀州ミカンの販売競争への影響と、価格暴落につながる事が一番怖く、支払いに応じる事は、当然だったのでしょうか。

ところが恐れていたことが起きます。龍馬のPR戦略は、賠償

問題だけではなく、結果紀州ミカンの評判にも悪影響が及び、時代ニーズもあつたのか、温州ミカンへと市場は大きく変わっていくのでした。いろいろ丸事件の、その後に行われた近年の調査で、いろいろ丸の積み荷は、何もなかったと報告がありました。物流が盛んになったことで経済効果が高まり、競争となっていく中で、いかにPR作戦が重要となっていくのか。火ぶたを切つたのが、紀伊國屋文左衛門というキャラクターの存在と、ストーリー性ではなかったのかと思うのです。それは今でも語り継がれるほど有名な歴史物語になっています。

江戸で爆発的に売れた紀州のミカン。ミカンが欠かせない『ふいご祭り』とはどんな祭りだったのか。

文左衛門の運んだミカンは、江戸で元手の三〇倍の金額で売却できたと言われていますが、本当だったのでしょうか。



有田市にある記念碑